二〇一五年八月二一日

愛犬が水先案内露の径　宏虎
回覧板受けとりに出て秋の蚊に　満天
秋茄子の雨滴はまさにアメジスト　菜々
真直ぐに一番星へ揚花火　なつき
揚花火寝転んで見る川堤　さつき
稲穂越し産土神を遥拝す　うつぎ
涼み舟夜景を見よと灯消す　さつき

二〇一五年八月二〇日

流木に塞かれて激つ秋の川　豆狸
爽やかに声かけて去る療法士　せいじ
夕さりてほのと色変ふ酔芙蓉　あさこ
秋めくや母退院の日を数ふ　せいじ
朝窓のカーテン繰れば風は秋　満天
秋暑し動く歩道にたたら踏み　菜々

二〇一五年八月一九日

落柿舎はこちらと傾ぐ案山子翁　明日香
うずくまり去来の墓に参りけり　明日香
雨音に間遠となりし法師蝉　よし女
井水汲むモーター悲鳴秋旱　豆狸
赤蜻蛉キャッチボールにぶつからず　治男

二〇一五年八月一八日

赤とんぼぶつかってくる浜の道　よし女
三代の筑後訛りや門火たく　豆狸
一湾の西に東に遠花火　さつき

二〇一五年八月一七日

車椅子押して額に玉の汗　さつき
道の神ここよここよとちちろ鳴く　豆狸
蝋涙をこそげて父母の墓洗ふ　なつき
星の竹戸ごとに並ぶ漁村かな　さつき
犇めきて盛りあがりたる蓮浮葉　泰山
さわやかや高齢講習合格す　よし女

二〇一五年八月一六日

地下水を吐き出すパイプ露しとど　豆狸
帰省子の土産は出世話かな　三刀
打水の珠ところがる苔の庭　かず
人だかり絶ゆることなき花氷　さつき

二〇一五年八月一五日

帰省の子まず仏壇へ手をあはせ　菜々
秋嶺の仏舎利塔のいや白し　はく子
バス停の人も黙祷終戦日　有香
子かまきり米粒ほどの鎌をふる　ともえ
蔕の棘尖る朝とれ秋なすび　満天
ヒロシマは吾のふるさと原爆記　かず